

軍人の時代遅れ

(大正8年8月)

陸軍中將 佐藤 鋼次郎

編集委員長…過去の偕行記事の中から興味深いものを紹介する。デモクラシー全盛時代、軍縮が叫ばれる大正期の予備役将校の就職問題に関する記事である。現在の自衛官の再就職問題と重なるものもあり、誠に興味深い。

なお、現代用語に編集させて頂いた。

●頭脳の涵養

身体は健全であるが、日頃頭脳を使わない人と新しい時代のことなどを話してみると、あたかも時代が異なる人のようで、一向に話ができないものが多い。これは、身体だけは健全でも、頭脳を全く使わないために惚けてしまっているからである。頭脳ばかりが明瞭でも、肺病患者のように身体の活動が全く不可能となつて生きていても、有意義な人生とも言えず、頭脳が惚けて身体ばかりが健全でも、有意義な人生とは言い切れないと思う。

我が在郷軍人の中で、特に我々のような連中には、全く物事に超然として、閑雲野鶴を友とし、悠悠自適の生活を送っている者が多い。身体の健全性において申し分はないだろうが、さて

新しい時代に関する知識については、隔世の人のような者が多いようである。

この結果を招いたのは、現役を退いてから頭脳の涵養に努めないだけでなく、現役の頃より余りに世間の情勢に対して超然たる環境に身を置いて常識を欠如させたからである。

現状の予備役将校の生活難は実に悲惨なものであるが、彼らに就職口を斡旋してやろうとしても一般社会が受け入れない。それは、彼らが身体の健全であることと正直で勤勉で規律を守ることが確かに長所として認められるが、如何にも新しい時代と遠ざかっていて、世間の常識が何もわからないことに閉口して、彼らを雇用しないからである。

国民皆兵主義からいえば、将校と言えども大部分は予備役として在郷させ、動員に当たり召集する方法を執るしかない。そして、いかに国が富んでも、彼らが在郷間に何らかの職業に従事しなくとも満足できる生活を送れるよう恩給を十分に与えることは、国家経済からこれは許されまいだろう。

欧米各国のように、予備役将校を他の社会に喜んで受け入れさせるには、従来における我が国の例に見るよう、我ら将校団が余りにも屹然とし、一般社会に対し超然とすることは、一考を要すると思う。